

みんなねっと 福井県かれん新聞第113号（奇数月発行）

事務局ホッとサポートふくい内〒910-0026 福井市光陽2-3-36

福井県総合福祉相談所内 ☎0776-24-5135

1) みんなねっと福井けんかれん 2025年（令和7年）11月1日

* 障がいのをのりこえるために



もくじ

- ・ ハートフル文化祭 . . . (1)
- ・ 県家連研修会について タウンミーティング . . . (2)
- ・ 報告、北信越ブロック長野大会 . . . (3)
- ・ みんなねっと京都大会 . . . (4)

ハートフル文化祭



- ・ 日時： 12月6日（土） 10:30～16:00
- ・ ～7日（日） 10:00～16:00
- ・ 会場： ショッピングセンターベル あじさいホール
- ・ 実施内容： オープニングセレモニー（6日）
- ・ ① 作品展（両日）
- ・ ② ステージ発表 . . . 演奏、合唱、ダンス
- ・ 発表など（両日）
- ・ ③ 即売会（両日）

*みんなねっと誌 購読 しましょう！ 例会などで活用を！

*「けんかれん新聞」に原稿や意見・質問などの投稿を！__

*家族会例会に集まって話合うのが健康にもいいです。

2) みんなねっと 福井けんかれん新聞 2025年 9月1日

2025 福井県精神保健福祉家族会連合会 研修会は、スローガン「家族支援で本人を支える」で10月26日(日)10時～ 福井県自治会館にて行われました。

10時～講演会、テーマ：地域で回復への大転換、一葉多用・拘束でない精神医療 — 講師の和田明美氏(元毎日新聞社記者)が話されました。

県 タウンミーティング

大野市、鯖江市、嶺南、福井市の4地区で8月末に行われました。

・はじめに、講演会などがあった。

・各障がいの問題点、難病について当事者から出されました。

障がいがあることを、ものともせず、県に要求していくことは大事だ。

報告 *ハートフル文化祭第1回実行委員会 9月9日(火)13:30～

* 同上 第2回実行委員会 10月30日(木)13:30～

福井県社協センター 吉村、小寺出席

・県内の精神科入院患者数については、

R2:1,816人 R3:1,771人 R4:1,622人 R5:1,671人 R6:1,659人

全国 26万6千人 (内 75歳以上 11万6千人、43.6%)



3) みんなねっと 福井けんかれん新聞 2025年 9月1日・福井
北信越長野大会について 令和7年10月16日(木)会場:長野市生涯学習センター
テーマ:本人・家族にとってのよりよい地域生活に必要な支援を考える

基調講演Ⅰ【地域で自立して暮らすには】

サブテーマ:私がメリデン版訪問家族支援に着目する理由 講師:白石弘巳氏(医師)

・日本の精神病床数は世界一多く、長期入院患者が多数存在している。

家族の立場と課題

- ・家族でミーティングをする。週1回、短時間でもするといい。家族で問題点を見つけて家族が協力して解決する力を付ける。

基調講演Ⅱ【メリデン版:本人・家族支援】講師:小松容子 宮城大学看護群・看護学研究科教授

メリデン版訪問家族支援とは

- ・当事者と家族を含めた支援を行い、家族全体の回復とつながりを促す支援方法。
 - 家族で情報を共有する ・病の体験(精神疾患に伴う驚きや恐怖、葛藤など)
 - それぞれの「夢・希望・日々の目標」

支援の方法 取り組みのポイント

・家族の夢・希望・目標を明確化・小さな達成を確認し、家族全体の雰囲気改善に繋げる・家族全体の回復を意識して支援する

シンポジウム 一家族支援について

家族・当事者の体験・意見など

- ・ 長野県連理事長 草間博様
 - 優生思想の歴史について話した。・現在も周囲の監視や差別の問題がある。
- ・ 石川県連 代理:別宗利哉様
 - 家族自身も夢を持って生きることが心の豊かさにつながる。
- ・ 福井県連会長 小寺清隆様
 - 子どもは新聞配達を長年続けている。家族間の会話は母親とは頻繁だが、父親とは少なめ。
- ・ 富山県連理事長 中村喜久男様
 - 子どもが包丁を持ち「なぜわかってくれない」と暴れた事例を紹介。
- ・ 新潟県連理事長 小林清一様
 - 家族が支えるのが当たり前という支援者の意識が問題だ。
- ・ 松本大学 教授 石黒栄亀様(当事者の体験)
 - 30代前半で統合失調症、50代前半でうつ病発症、自閉症背景が判明した。

その他 参加者は80名程度で福井県からは7名が参加した。以上

(文責：塩谷 編集など：小寺)

4) みんなねっと 福井けんかれん新聞 2025年 9月1日

みんなねっと京都全国大会について R7.9.6 約 900 名参加



スローガン：「精神保健福祉の未来を描く 家族ほっこりまるごと支援を目指して」

講演 高木俊介氏（たかぎクリニック院長）

演題「人と人との対話が拓く精神医療福祉のこれから」

- ・厚労省の「にも包括支援」は、実態が少ない。」
- ・これから、福祉や医療も経済的な限界を言い訳として、どんどん切り詰められてゆくだろう。
- ・家族会が考えて、一致して働きかけていかななくてはならない。

全国家族会結成 60 年記念リレートーク

- ・1962 年 7 月に丹後の地域家族会など全国の家族会で結成した。
- ・1965 年、世界で一番早く、全国組織として「全国精神障害者家族連合会」が誕生。
- ・運動体として作業所づくりを進めた。
- ・2005 年 「全国精神障害者家族連合会」の助成金不正使用で解散
- ・2006 年 「全国精神保健福祉会連合会」（通称：みんなねっと）設立
JR 運賃の精神障がい者にも適用などの運動を展開した。

毎年、全国大会を開催しており、8 ブロック大会も開催している。

第 2 分科会 「親亡き後をみすえた家族まるごと支援」・小寺参加 約 150 名参加

A 松田美枝（京都文教大学）

本人の最初の異変時の平均年齢は 21.3 歳で、初診までに平均 10 か月かかっており、病状があんていするまでに平均して 13 年 8 か月かかっている。（京家連調査）

B 鈴木美帆（家族スタッフ）

「ひきこもり」を、いくつもある相談機関では無力だった。家族会のメンバーが 2 日に渡り、自宅の近くで待機することで危機的状況をやり過ごした。

C 板垣修（ひきこもり・生きずらさの当事者団体 京都コレカラ）

自分自身 37 歳まで引きこもった。ターニングポイントは、母が心筋梗塞で緊急入院したこと。本人が介護して社会的まじわりを始めた。自分の意志で一歩踏み出せたのが良かった。

D 金井浩一（相談支援事業所しほふぁーれ代表）

アウトリーチ、非定型対応、寄り添い、これらの活動は公費を国が支給するにあたって根拠にあいまいさが生ずることから「サービス外」「定形外」とみなされてほとんどが報酬化されない。しかし、やるしかない。

以上

(文責：小寺清隆)